

マタイ7章1-6章「裁いてはならない」

1A 神からの裁き 1-2

1B 善悪の知識の木

2B 神の赦しと憐れみ

3B 裁くべきこと

1B 見分け

2B 国や教会

4B 裁いてはならないこと

1C 自分を差し置いた裁き

2C 早まった裁き

3C 動機にまで至る裁き

4C 疑わしいことに対する裁き

5C 偏った裁き

6C 憐れみのない裁き

2A 兄弟の過ち 3-5

1B 自分の過ちへの盲目 3

2B 他人を直そうとする過ち 4

3B 自己吟味 5

3A 豚に真珠 6

本文

山上の垂訓シリーズは、7章に入ります。「1 さばいてはいけません。自分がさばかれないためです。2 あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤で量り与えられるのです。3 あなたは、兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか。4 兄弟に向かって、『あなたの目からちりを取り除かせてください』と、どうして言うのですか。見なさい。自分の目には梁があるではありませんか。5 偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取り除くことができます。6 聖なるものを犬に与えてはいけません。また、真珠を豚の前に投げてもはいけません。犬や豚はそれらを足で踏みつけ、向き直って、あなたがたをかみ裂くこととなります。」7章は、「裁くこと」について学びます。

1A 神からの裁き 1-2

1B 善悪の知識の木

聖書には、神だけが権利を持っていることが、いくつかあります。人にはしてはいけないことがあ

り、神のみにそのことを行なう主権が与えられているものがあります。一つは、人の命を取ることです。神が命を与え、そしてその命を取ることができます。ヨブが、自分の息子たちや娘たちの命が取られた時に、「【主】は与え、【主】は取られる。【主】の御名はほむべきかな。(1:22)」と言いました。ですから、人がその中に介入すると、それは殺人となります。人が自然に死ぬことについては、誰も責めませんが、もう余命二ヶ月と言われている人であっても、その人を殺してしまつたら、殺人の罪に問われます。なぜ、そこまで厳密なのか？神のみが、命を取ることができるからです。

もう一つ、神のみが持っている権利があります。それが「裁くこと」です。神のみが、人の人生と永遠に対して報いを与え、その人の状態をどうするかについてお定めになることができます。「復讐と報復はわたしのもの。(申命 32:35)」7章には、キリストの弟子は、自分のしていることに対して神が報いを与えられる時があることを知っていることを教えています。神のみが、その定めをすることができ、他の人間はできません。その裁きを人はすることはできないということです。

しかし、ここから人間という存在の微妙な姿ですが、人は神のかたちに造られており、地上にあるものを支配するように命じられています。つまり、神のみが裁きを行われるのですが、神は人に裁く権威を与えられて、人が神を恐れて、神に従うことによってその裁く権利を行使することができます。ノアの時代の洪水の後、主がノアに対して、「人の血を流す者は、人によって血を流される。神は人を神のかたちとして造ったからである。(創世 9:6)」と言われました。神がご自分の権利を人に与えられ、それを人が行使するように命じられています。

しかし、ここで神を恐れ、神に拠り頼む中で、神から聞き、判断を下すという、神から任されたものを管理しているのに、そこから逸脱することがあります。自分が裁く者である、裁くことが自分の属性であるかのように勘違いすることがあります。私たち人間は、神に似せて造られていますが、神自身ではないのです。この微妙な関係を、はっきりと区別しているのが、あの善悪の知識の木です。神のみが善悪を知っている方であられ、私たちは神から聞き、寄り頼むことによるのみ、その判断ができるのです。ところが、悪魔はあなたがそれを食べなさいと誘い、食べたなら「神のようになって善悪を知る者となる」と唆したのです。自分自身でその善悪を判断するとした時、それは自分が賢いとしている時であり、高慢であり、神のように振る舞っていることに他なりません。

2B 神の赦しと憐れみ

ところで神は、人間がはじめからご自分の裁きに耐えられない存在であることをご存じであります。今、お話したノアの時代の洪水ですが、人々が悪に傾いて、それで主は、人をお造りになられたことを残念に思われて、水によって消し去ることをお決めになりました。

そして、洪水の水が引いて、箱舟からノアが出て、それからノアは祭壇に全焼のいけにえを献げました。その時に神はこう言われたのです。「わたしは、決して再び人のゆえに、大地にのろい

をもたらしはしない。人の心が思い図ることは、幼いときから悪であるからだ。(創世 8:21)」神は、もし人をその悪に従って裁いたら、再び彼らを滅ぼさなければいけなくなります。人は悪に傾くものだから、彼らを憐れみの法則によって取り扱わないといけないとお決めになったのです。これが、神が罪を赦し、憐れみを示す動機になっているのです。なぜ、山上の垂訓において、罪の赦しについてイエス様が拘りをお見せになっているかは、ここにあります。人は、悔い改めによる罪の赦しなしには、決して生きていけないからです。イエス様は、「5:7 あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるからです。」と言われました。

ですから、もし私たちが憐れみの枠組みを超えて、そこから出て行ったらどうなるのでしょうか？そうです、再び裁きの世界に入っていくことになるのです。ですから 2 節で、イエス様がそのことを言われています。「あなたがたは、自分がさばく、そのさばきでさばかれ、自分が量るその秤で量り与えられるのです。」自分がその裁いている量りが、そのまま自分に帰ってきます。マタイ 18 章に、一万タラントの借金をしている人の話が出ていますが、主人がそれを全て帳消しにしたのに、自分に百デナリの借りがある仲間のしもべを赦さなかったので、主人は彼のその一万タラントの借金を返すまで、獄吏に入れておきました。自分が憐れみを示さなければ、憐れみのない裁きが行ってきます。

パウロは、自分は正しいと思っている人々に対して、こう言いました。「ローマ 2:1 ですから、すべて他人をさばく者よ、あなたに弁解の余地はありません。あなたは他人をさばくことで、自分自身にさばきを下しています。さばくあなたが同じことを行っているからです。」今、世の中では「ブーメラン」という言葉が流行っていますね。自分が非難していること、まさにそのことが自分に帰って来るという意味です。ちょっと立場や環境を変えれば、自分が非難していることを、まさしく行っていることに気づくのです。

しばしば、自分に問題がある時に、その問題のことを他の人に見つけると、その裁きは激しくなります。ダビデが、ナタンから、たとえを話された時、激しく怒りました。たった一匹の雌の子羊を飼っている男から、その子羊を取り上げて、客に料理を出したという男について、ダビデは「死刑だ」という極端な言い方をしたのです。それは、自分自身がやましかったからなのです。

3B 裁くべきこと

このようにして、裁いてはいけないという戒めには、神ご自身と私たちの関係に深く関わっていることが分かりました。けれども、他のイエス様の戒めと同じように、数多くの人々がここの「裁いてはならない」という言葉の意味を誤解しています。

1B 見分け

その一番大きな誤解は、「我々は、判断をしてはいけない」というものです。何かについて、また

誰かについて意見を言うことについて、「それは、あなたは裁いているのですよ」ということがあります。今の時代、この傾向が非常に深刻であります。何か意見を話すと、「あなたは、そうやって私を裁いている」として非難するのです。けれども、「あなたは裁いている」と非難しながら、実はその人こそが相手を裁いていることがあります。けれども、裁いてはいけないということは、私たちが一切の判断力を放棄することでは決してありません。先ほど話したように、神は一人一人に、ご自分のかたちに似せて、物事を判断するための力を任せておられるのです。もし、イエス様が裁いてはいけないということ、判断してはいけないという意味で語っておられるなら、その後でお語りになられていることを、イエス様ご自身が違反していることになってしまいます。6 節、「**聖なるものを犬に与えてはいけません。また、真珠を豚の前に投げてはいけません。**」かなり、辛辣な物言いです。人を犬や豚呼ばわりしているのですから。明らかに、イエス様は見分けを行われています。

このように、裁いてはいけないというのが、判断をしなければいけないという意味では全くありません。むしろ正しい判断をなさい、正しい裁きをなさいという命令まであります。「うわべだけで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい。(ヨハネ 7:24)」使徒パウロは、テサロニケの人たちにこう言いました。「すべてを吟味し、良いものはしっかりと保ちなさい。(1テサロニケ 5:21)」

私たちキリスト者は、罪や偽りに対しては厳しくあるべきです。互いに訓戒をなさいと聖書に書いてあります。さらに、神は、固有名詞を出してまで、それを覚えていなさいと命じられています。例えば、コラの反乱について、コラの事件について覚えさせています。アマレクがイスラエル人を襲ったことについて、永遠に神はアマレクに戦われるとしました。そうした罪が、忘れたころにまた浮上してやってくるからです。そして、パウロは若い牧者であるテモテに、手紙の中で、「ヒメナオとアレクサンドロがいます。(1テモテ 1:20)」など、名前を挙げて警戒させています。ローマ 16 章 17 節にも、「あなたがたの学んだ教えに背いて、分裂とつまずきをもたらす者たちを警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。」とまで言っているのです。罪について、何かそれにしっかりと対峙している者が悪い者で、それを敢えて言わない者が、人を裁かない正しい人のように見えることがあります。いいえ、その反対が真実です。

2B 国や教会

同じようにして、裁いてはならないということについて、誤解しているのは、裁判や国家権力に対して否定的な思いを持つことです。裁判所は、重大な犯罪を行なった者たちに、特に死刑をもって処罰することさえあります。国が、悪を行なう者たちに対して剣を使ってでも処罰することについて、「裁いてはならない」として政府に反対することは、ここでの意味を大きく取り間違っています。なぜなら、ローマ 13 章など、神がすべての権威を立てておられ、剣をもっている彼らは神のしもべであると書いてあるからです。

国だけではありません。教会そのものが、内部を裁かなければいけないことがあります。それは、

教会の中に罪や悪があってはならないからです。「18:15 もしあなたの兄弟が、自分に対して罪を犯したら、行って二人だけのところで指摘しなさい。」と言われましたね。そして聞き入れないなら、二人もしくは三人の証人の証言によって、そして聞き入れないなら、教会に伝えて、それでも聞き入れないなら、教会の交わりの中に入れないということをしないといけません。そして、パウロはコリントにある教会で、罪を犯している者がいるのに、そのままにしているのが寛大な心なのだとしていたのですが、それこそがあなたがたの思い上がりであり、「あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。(1コリント 5:12)」とパウロは言いました。

4B 裁いてはならないこと

ですから、私たちは裁かなければいけないことがあるのです。では、イエス様がここで、「裁いてはいけない」と言われたのは、一体、どういうことなのでしょう？

1C 自分を差し置いた裁き

それは、「自分のことを差し置いた裁き」であります。「ガラテヤ 6:1 兄弟たち。もしだれかが何かの過ちに陥っていることが分かったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。」誰かが罪を犯していて、その人を正そうとする時に、自分自身も正されなければいけない、神の裁きの下にいるのだということをおぼえてはいけないということです。神を恐れて、同じ過ちを犯していないか吟味しつつ、それで判断していくということでもあります。パウロは、「しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。(2コリント 11:31)」と言いました。絶えず、「正しいのは神のみである。人はみな限界があり、不完全で、そこに正しさはない。」ということをおぼえておくことです。

しかし、そこに自分自身も神の裁きの中にあるというのが無くなり、熱心になりすぎて、相手の罪を責める姿勢に出るならば、それは神の位置に自分を置くことになり、非常に危険です。そこには、あらゆる悪が出てきます。妬み、恨み、憎しみ、誹りなどあらゆる悪意が出てきますが、自分は正しいと思っていて、一向に気づきません。

2C 早まった裁き

次に、「早まった裁き」があります。パウロがこう言いました、「ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。(1コリント 4:5)」早まったところでの判断があります。多いのは、まだ他人から見聞きしたことだけで、つまり噂だけでそれを事実であるかのごとく判断することです。箴言には、「18:17 最初に訴える者は、相手が来て彼を調べるまでは、正しく見える。」とあります。初めに聞いた人の言葉が正しく見えるのです。両側からの話を聞かなければ、真実は分かりません。けれども、先ほどイエス様が話された「うわべで裁く」ことを行ってしまうのです。

興味深いアメリカの住宅ローンのコマーシャルがあるのですが、「早まって裁かないように」というキャッチフレーズのもので。例えば、患者さんの病室で二人のお医者さんが話しをしています。そこにハエが飛んできました。心臓が停止した時の電気ショックを手にしていたので、それでハエを殺しました。「こんなん、殺せたわ」と言ったのですが、なんとその患者の奥様と娘さんが面会にやって来ていたのです。お二人は、「電気ショックを与えたけれども、これでこの患者さん死んじやったのね。」という意味合いで受けとめたのです。¹

3C 動機にまで至る裁き

そして、相手の動機までを知っているかのような判断も、行き過ぎた裁きになります。主にしか、その人の心のはかりごとは分かりません。隠れた行いを主は必ず裁かれますが、私たちには分からないことがあります。イエス様ご自身が、毒麦の喩えの中で、収穫が来るまで待たないと、良い麦も摘み取ってしまうから、そのままにしておきなさいと言われました。本当にどうなのかは、必ず明らかにされますから、自分自身でそこまで判断してはならないのです。

4C 疑わしいことに対する裁き

さらに、「疑わしいことについて」の判断は控えるべきです。「信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。(ローマ 14:1)」疑わしいことというのは、必ずしも聖書にはっきりと、これが罪だと書いていない分野のことです。信仰の持ちようによって、はっきり意見が別れるというようなものです。主の日について、毎日だと考える人もいれば、特定の日だと考える人もいる、といったような内容です。私たちが、このことで罪であると裁いてしまうのであれば、神が命じていないことまでも、さらに規則をつけて、それに基づいて裁いてしまいます。

5C 偏った裁き

そして、偏った裁きをすることもあります。神はえこひいきなさらぬ方であるのに、いつの間にか心の中で差別をしています。人々の言葉や行いによって動くのではなく、その人の立場や素性に基づいて、人を判断します。例えば、ヤコブ 2 章に貧しい人が集会にやって来て、「あなたは立っていなさい」と言い、金持ちに対しては「良い席にお座りください」と言って、心の中で差別をして、悪い考えで裁く者になっていると書いてあります。

6C 憐れみのない裁き

最後に、「憐れみのない裁き」があります。「あわれみを示したことの無い者に対しては、あわれみのないさばきが下されます。(ヤコブ 2:13)」これは、私たちが何か人の罪を指摘して、その人が立ち返ることを願ってそれを言うのではなく、鬱憤を晴らすためだけに責めているのであれば、それは憐れみのない裁きです。

¹ <https://youtu.be/To5XOyBBtDg>

2A 兄弟の過ち 3-5

そこで3節から5節ですが、今、話した中で一つ目、「自分のことを差し置いた裁き」を、兄弟に対して行ってしまうことの過ちを教えてください。

1B 自分の過ちへの盲目 3

3節は、自分があの人には罪があると騒いでいる中で、実は自分自身が大きな問題を抱えている本人であるということです。イエス様は、生まれつきの盲人を癒された後で、その盲人がユダヤ人指導者によって裁かれ、共同体の中から追放されました。そして彼のところにイエス様が行き、彼は、イエス様を神の子キリストとして礼拝しました。その時に、パリサイ派がいました。彼に対して、こういわれました。「9:41 もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、今、『私たちは見える』と言っているのですから、あなたがたの罪は残ります。」見えていると思っている者が実は見えなくなっているのです。

2B 他人を直そうとする過ち 4

そして、目に梁があるのに、相手の目のちりを取ろうとすれば、それは人々を傷つけ、大きな害を与えます。熱心になればなるほど、神に逆らってしまうこととなります。イエス様が弟子たちに、予め警告しておられました。「ヨハ 16:2-3 人々はあなたがたを会堂から追放するでしょう。実際、あなたがたを殺す者がみな、自分は神に奉仕していると思う時が来ます。彼らがそういうことを行うのは、父もわたしも知らないからです。」彼らは、キリストの弟子たちを追放し、殺そうとするのですが、それは、悪を取り除こうとしていて、実は自分のほうが悪を行っていることに気づいていないのです。

3B 自己吟味 5

ですから、大事なものは自己吟味なのです。「**まず自分の目から梁を取り除きなさい**」と言われました。「I コリ 11:31 しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれることはありません。」自分を裁くことによって、初めて見えるものが見えて、神に仕えることができます。

3A 豚に真珠 6

最後に、逆の極端についても警告しておられます。

6 聖なるものを犬に与えてはいけません。また、真珠を豚の前に投げてはいけません。犬や豚はそれらを足で踏みつけ、向き直って、あなたがたをかみ裂くこととなります。

聖書に出てくる犬は、極めて否定的に使われています。豚はもちろん、汚れた動物と律法の中でみなされています。私たちが兄弟に対して、働きかけることによって、もしかしたら彼が主に立ち返るかもしれません。自分自身を吟味しながら、重荷を負って助けるべきです。けれども、福音の

話を聞いても全く意を介さない人たちがいます。むしろ反対する人たちがいます。歪曲する人がいます。そういう人たちに関わる必要はない、というのがここでの教えです。

私たちは、しばし情が入りすぎて、自分が救わなければいけないという錯覚に陥ります。「この人は可哀想だから、そして私がここにいるのだから、私でなければ助けることはできないのだ。」と思うのです。けれども、それは分からないのです。見極めて、大事な時間、大事な資源、これらが無駄なものに使わない知恵が必要です。